



はじめに

校長 青木 知典

人は、自分の内面にある無数の知識や経験を基に、新しい問題を解決しようとしています。その知識や経験は、多くの場合、普段から意識していたり目にしていたりしているわけではありません。折々の出来事や問題に応じ、頭に浮かび上がってきた知識や経験を使って思考し、より適切な解を選んでいきます。私たちは、こうした頭に浮かんでくる知識や経験などを、潜在と呼ぶことにしました。潜在の中には言語化しにくい感性や情感のようなものが含まれていると思います。また道徳的実践力のような、力も含まれると思います。

授業における問題解決でも、子供は、自らの潜在に問いかけ、知識や経験を引き出し、それを活用してロジカルに、クリエイティブに思考し、解決しているはずですが。このことに気付かされたきっかけは、詩人 谷川俊太郎先生の、本校における講演にありました。

「詩を書くということは、自分の頭を空っぽにして自分の潜在意識と出会うこと」と、お話しされ、言葉遊びや落語等の大切さを説かれました。

また落語家の桂歌春先生は、「ダジャレを一人で言うと、ただのダジャレ。でも一人二役で話すと、小噺になる」と話され、言葉遊びの楽しさを子供たちに説かれました。

こうしたご講演を下に、言葉の世界を広げ潜在を豊かにする活動として、「ことばらんど」が生まれました。また児童会の放送委員会では、「だじゃれキング」といった番組を続けてきました。潜在にある言葉があふれ出て、数多くの作品が校内で発表されてきました。

また、どの学習場面においても、子供の潜在に働きかけることは有効であり、子供がロジカルにクリエイティブに思考するようになるとの考えから「つ北授業モデル」を作り、実践を通して検証を進めてきました。

研究の進捗は、しばしば教員同士の活発な論議と混沌により、停滞するようにも見えました。しかし、多くの授業実践から、つ北授業モデルの確かさをつかみ、ここまで研究を進めてくることができました。

本紀要にその成果の一部を発表するに当たり、ご講演やワークショップ型のご指導で、私たちを導いてくださった先生方に感謝申し上げます。

また、研究授業等においてご指導いただいた先生方と東京都教育委員会、昭島市教育委員会に心より感謝申し上げます。